

大倉、検温・顔認証ゲート参入

マスク識別、年内1万台めざす

不動産中堅の大倉(大阪市)は、オフィスビルや商業施設の入り口に設置する入場ゲートの製造・販売事業に参入した。マスクを付けているかどうかの顔認証と非接触の検温を同時にこなすシステムを開発した。高熱の人が通ろうとするとアラームが鳴り、入場を制限できる。緊急事態宣言が解除され、入出が戻っているが、新型コロナウイルスの感染「第2波」に備えた手段として普及を見込む。

5月に納品を始めた。関係会社の中国企業に製造を委託し、大倉が輸入販売する。価格は販売店によって異なるがアルミニウム合金製のゲートで55万円。国内で流通する一般的な製品の半分程度という。年内に1万台の売り上げを目指し、今後はタイなど海外でも販売する。

システムはゲートと、高さ約1.5mの柱に載せたタブレット型の端末からなる。柱は赤外線センサー、端末はカ

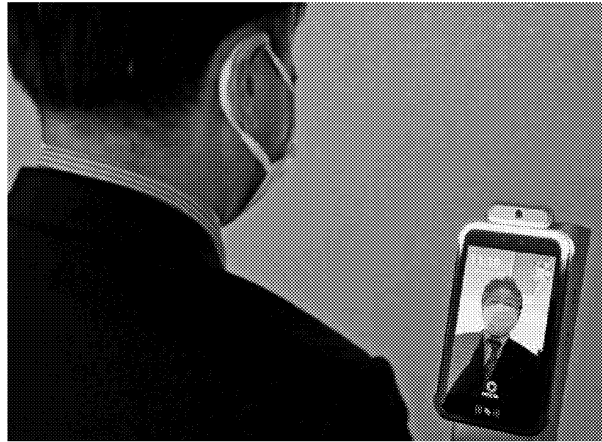
メラを内蔵。前に人が立ち止まると皮膚に接触せず、額が発する赤外線を検知して体温を1秒以内に測る。

検温と同時にカメラと人工知能(AI)により顔認証する。マスクを付けているか識別し、付けない場合は、マスクを着用して「ください」と音声で促す。データベースに3万人の顔を登録でき、オフィスでは社員など事前登録した人を見分けて入場を管理する。顔のデータと入場時刻を記録しており、後で入場者の感染がわかった際に濃厚接触者の絞り込みに使える。

緊急事態宣言が解除され、百貨店といった商業施設も営業を再開した。一方で熱のある人は入場を断るなど感染対策を取る場合が多い。ただ主流の非接触式の体温計は人手がかかるほか、計測温度に誤差が出やすかった。

大倉は赤外線センサーや額の温度から体温を推定するAIの精度を向上。誤差をセ氏

大倉は住宅・ホテル開発を手がけ、設備施工を強みとする。売上高は2020年3月期で約300億円。M&A(合併・買収)にも意欲的。国内は新設住宅着工戸数が頭打ちとなっており、住宅をAIやあらゆるモノがネットにつながる「IoT」を使ったスマートホームにリフォームするなどの新事業の拡大を目指している。(梅国典)



検温の誤差をセ氏プラスマイナス0.2度以内に抑えた

大倉はM & Aも積極的に進める	
年月	内容
2020年1月	警備会社の日本総合警備保障(大阪市)を買収
4月	インフラシステム開発のSGI(東京・千代田)をグループ会社化
	EC運営のウィ・ジャパン(東京・千代田)をグループ会社化
	北海道函館市のホテルを買収
5月	住宅設備のアゴラ(東京・北)をグループ会社化